

---

# 中二少年A & B

谷津矢車

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

中二少年A&B

### 【Nコード】

N0848C

### 【作者名】

谷津矢車

### 【あらすじ】

渋谷に友達と繰り出す少年。教室の片隅で、自分の世界に浸る少年。その二人には、共通点があった。それは、「ナイフを所持している」こと。でも、たどる結末はまるで違うものだった。……  
・あなたには、違いがわかるかな？

中二少年Aの場合(前書き)

真似はしないようにしてください。

## 中二少年Aの場合

またやってきた。愚民どもが集う魔窟街、渋谷へ。

相変わらず、汚い街だ。お前もそうだと思わないか。  
吐き捨てられた痰、煙草の吸殻、誰かの残した赤いゲロ。

それだけじゃない。この暗黒街に巣食う、アタマ悪そうな愚民たち。まったく汚らしい。

もし、オレに街一つを吹き飛ばす力があつたら、この魔窟を吹っ飛ばしてやる。

その方が日本の為、いや、オレの為だ。

ちっ。アタマ悪そうな女が、オレにバッグを思いつきりぶつけてきやがった。

ったく謝れよ。少しは申し訳なさそうにしゃがれってんだ。

フン、まあ、許してやる。今日は、いつものオレとは違うんだ。  
いつもの、ケンカの弱い僕とは……

お前にだけ教えてやるよ。

オレのジャンパーの右ポケットには、「スミス&ウェッソンの  
「スナイフ」が一丁入ってる。

え、「スミス&ウエッソン」って何？だと？

そんな事も知らないのか。ええとだな……………え〜と……………オ、オレのダチ公。

え、「シースナイフ」って何？だと？

お前何にも知らないんだな。シースナイフっていうのは……………シース、シース、シス、死す……………殺人用ナイフのことだ！

……………な、何だよその目は。

「あゝ君！」

オレに話しかける愚民は一体だれ……………つつつつつつって、ポリ公！！

おい、ズラかるぞ！

なんで、つてお前バカか！僕がナイフ持つてるのばれたら、兄さんの部屋から内緒で持ってきたこのナイフが没収されちゃう！

あわわ、もう逃げられない。顔も見られてるし……………

「ほら。ハンカチ落としたよ。（満面の笑み）」

……………あ、ありがとうございます。

「うんうん、あ、もうそろそろ夕方になるから、あまり遊び歩いちゃダメだよ。じゃ、本官はこれで」



~~~~~!!!!

「ちよい裏までツラかせや（満面の笑み）」

あ、ちよ、ま、まって……話せば分かるから………って、  
ぎよえ~~~~~!!!!

………（しばらくお待ちください）………

「ち、おめえ、全然金持ってねえのな」

へへ、お小遣い、月に千円なもので。

「お？おい、これアーミーナイフじゃねえか!!」

あ、いや、それはシースナイフって………

「じゃかあしい!……おい、これ、オレによこせ」

そ、それはにいさんの………

「またボコられてえのかよ（ボキボキ）」

なんでもないです（即答）

「じゃあ、もらってくぜ〜、へへ、儲け儲け〜！」

さようなら〜ナガタさん。

……………帰ろうか。

はあ、どうしよう、あのナイフ、兄さんのなのに……  
え？いくら位なの？だって？たしか兄さんは15000円で買ったって言った。

え？君のお小遣いの15ヶ月ぶんだね、だって？……ははは、  
そうだね。

そういえば、渋谷ってきれいになったよね。  
以前と比べたらゴミも減ったしカラスなんかも減ったし。

あと、帰り際にいつも感じてたんだけど。

渋谷の夕焼けって、キレイだよな。

はは、でも今日は霞んで見えないや。

中二少年Bの場合(前書き)

真似しないようにしてくださいね。

あと、この文章、とてもコメディイとは呼べませんね。

## 中二少年Bの場合

わいわいと、喧騒に包まれた教室。休み時間というゴキゲンな時間を受けて、教室の空気まで浮かれてるようだ。

窓の向こうには、どこまでも続きそうな青い空と、カンカンとゴキゲンに輝く太陽。その下で、サッカーやらバレーボールやらに興じる生徒たちがまばらに見える。風向きが変わるたび、彼らの笑い声が、きゃっきゃと聞こえてくる。

教室の中では、女子たちがひそひそと話してる。何がおもしろいのだろう、どうせ、ろくでもないことをさも重大な秘密のように囁きあい、下卑な笑い声を上げてるだけなのに。あいつら、今、こつちを盗み見ながらひそひそとやってる。おい、僕は上野動物園のパンダじゃないんだ、見世物じゃないんだぞ。

教室の隅のほうでは、不良グループがタバコをぷかぷかやりながらダラダラしてる。

あるものは髪の毛を異様にいじくり、またあるものはゴツツイナイフを他の仲間に見せびらかしてる。

教室のもう一方での隅では、性格暗めの連中がたむろしている。聞き耳を立てると、マテリアだのロマキャンだのと、意味のさっぱりわからない単語が飛び交っている。

それらの喧騒が、僕には関係ないところでサーっと流れていく。まるで、僕のことをシカトするかのよう。

僕は、休み時間が嫌いだ。

だって、休み時間に、自分の身を置ける場所がないから。

休み時間は、みんながみんな楽しいわけじゃない。僕のように、与えられた机の上には居場所のない者にとって、休み時間は軽い拷問でしかない。

「なんでみんな笑顔なのに、僕だけ無表情なんだろう」という疑問が、頭の中でぐるぐる回るから、苦しい。

ぐるぐる。ぐるぐる。

でもさびしくはないんだ。だって、僕にはこいつがいる。白く輝く中折れ式のナイフ。

こいつが、僕の疑問をズバツと一刀両断してくれるような気がする。そんな力を宿した、不思議なナイフ。

僕の居場所さえ切り開いてくれそうな光を放つ、僕のナイフ。

ポケットからナイフを取り出し、刃を出し、目の前にかざす。

はは、キレイだ。

ねえ、その反射光で、僕の居場所を照らしておくれよ。そのエッジで、僕の居場所を切り開いておくれよ。

「おう、ササキ、いいもの持つてるじゃねえか」

僕を呼ぶ声。ナイフから視線を外すと、目の前に、ボンタン、長ラン、リーゼントの不良が僕の前に立っている。ウチのクラスの不良、ナガタだ。

さっき、不良仲間に関自分のナイフを見せびらかしてたヤツだ。聞いたところだと、そのナイフ、他のクラスの男子からカツアゲして手に入れたらしいけど。

「……………何か用？」

しまった、出来るだけ穏便な受け答えをしようかと思ったのに、そっけない響きになってしまった。

案の定、ナガタを刺激してしまったようだ。それが証拠に、ナガタの鼻がヒクヒクひくひくしている。これが、ナガタが怒るときのサインなのだ。

「ちつ、オメエ、いい度胸じゃねえか。オレに「何か用？」とは  
「よ」

鼻をひくつかせながら、ナガタは僕に顔を近づけてきた。眉を上げ、目を充血させ、おまけに鼻をひくひくさせて。

……………豚に似てるな。

豚のイメージとナガタの顔が脳裏でぴったり一致した瞬間、思わず吹き出してしまった。

ああしまった、さらにナガタを刺激してしまったようだ。

「おめえ、ぶっ殺すぞ！」

そう言うのが早いか遅いか、ナガタは僕の左頬をグーで殴りつけた。僕は椅子からころげおち、周りの机や椅子にどんがらがっしゃんとぶつかった。その音で、クラスの喧騒は、ぴたりと止んだ。

「イライラさせやがってよ。．．．まあいい、それよりよ、ササキ。」

ナガタは僕を見下ろしながら続ける。

「オメエのそのナイフ、オレによこせよ。オメエみたいなネクラが持ってたって何の意味もねえだろ？」

お前たち不良が持ってたって、かつこつけるためだけのアクセサリー程度の意味しかないだろうが。でも、僕にとっては大事な道具なんだ！僕の居場所を照らしてくれる、僕を守ってくれる、大事な大事な道具なんだ！

．．．．と、言いたかったが、左頬の激痛で、言葉にならなかった。

「．．．．なにゴモゴモ言ってるんだよ。んでよ、そのナイフを差し出すっていうなら、今日ントコは許してやるよ」

ナガタはウンコ座りをしながら、僕を見下している。豚みたいな顔が、勝ち誇ったように歪む。

．．．その反射光で、僕の居場所を照らしておくれよ。そのエッジで、僕の居場所を切り開いておくれよ。

．．．そのエッジで、僕の居場所を．．．

僕は、右手に持っていたナイフを強く握り締めた。

「おい、はやくよこせ……」

ナガタが言い終わるのが早いか遅いか、僕はさつと体勢を立て直すと、渾身の力を込めてナガタの豚ツラを、銀色に輝くナイフで切りつけた。

「ぎゃあ~~~~!!」

ナガタは悲鳴を上げた。顔は鮮血で染まり、よっぼど痛いのか教室の床を、まるで芋虫のように転げまわっている。

……まだだ……。

僕の心の中で、誰かがささやいた。

確かに、まだナガタは僕に反撃するだけの力を有している。今の内にもナガタを叩いておかないと……

ナガタに反撃されるといふ恐怖心に煽られ、僕はまたナイフを強く握った。

……

そのあとの事は、正直何も覚えていない。

弁護士さんの話によると、あのあと僕はナガタに馬乗りになり、腹をナイフで二、三回刺したらしい。

運よく、ナガタは助かったらしい。僕は、殺人者にならなくて済んだ、ということらしい。

そうそう、弁護士さんに差し入れを頼んでるんだけど、ダメだつて言うんだ。

必要なものなのに、「そんなものいらない」の一点張りなんだ。

え？その必要なものって何？だって？

決まってるじゃないか。

ナイフだよ。

僕の居場所を切り開いてくれる、夢のツール。

僕の居場所を照らし出してくれる、ステキなツール。

あれさえあれば、僕は自分の居場所を作れる。自分の居場所で、生きてゆける。

中二少年Bの場合（後書き）

違いは、わかりましたか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0848c/>

---

中二少年A&B

2010年10月28日03時05分発行